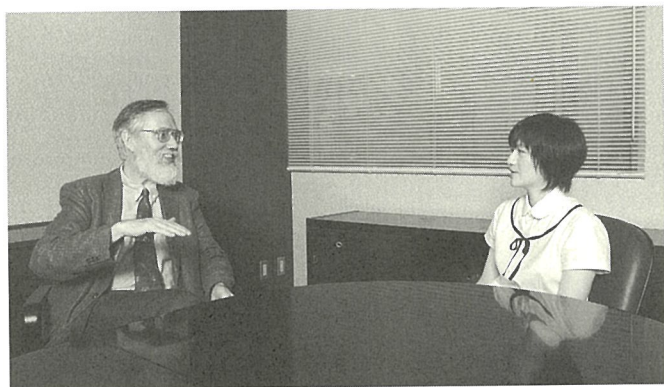


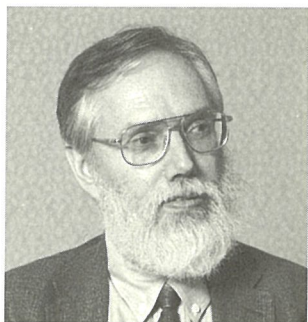
# リベラル・アーツ教育を軸に 社会意識の高い品格ある女性を育成する



女子大学の学長にNicholas John Teele教授が新しく選ばれました。これを機に、21世紀に求められる女子大学の役割について、文学研究科英語英文学専攻博士課程で学ぶ松井圭伊子さんがインタビューしました。

## 同志社女子大学の行うリベラル・アーツ教育とは

**松井** 学長就任にあたってまず思ったことをお聞かせください。  
**ティール** 約6000人が在籍する教学の責任者になったことについて、非常に重い責任を感じています。学長になるとは思いませんでしたので、まずは自分の教育をしないとけない(笑)。中国の古典『大学』に、まず自分の心の中を改めよとあります。学生、教職員に対して、そして社会に対して同志社女子大学の教育が浸透していくためには、まず学長である私自身の心が正しくないといけない。そうして初めて、次のステップが見えてきます。そこで私も、自分の心の中を整理することから始めました。新島の伝記をはじめとして同志社の歴史に関する文献を読み直し、同志社の草創期や明治時代の教育制度の変遷なども再認識しました。同志社女子大学は今年4月に4学部10学科となりました。個々の学科の目標、教育する学生像なども、学長の立場から全体を把握する必要があります。  
**松井** 同志社女子大学には、キリスト教主義、国際主義、リベラル・アーツの三つの教育理念があります。これらをどのように考えておられますか。



# Nicholas John Teele

(同志社女子大学学長)

1944年11月、米国コロラド州生まれ。1969年テキサス大学（オースティン校）学芸学部卒業。

1980年同大学院比較文学博士課程を修了。文学博士。

幼少期から高校1年までを日本で過ごし、米空軍勤務を経てテキサス大学で学び、その後再来日。1985年放送教育開発センター助教授を経て、1988年に本学学芸学部英文学科助教授、1990年に教授に就任した。1998年から本学国際交流センター所長を3年間、2003年から英語英文学科主任を3年間務めた。

専門分野は比較文学、日本文学、英米文学。研究テーマは古今和歌集と百人一首の比較文学的研究、巡礼の比較文化的研究、英語短歌など。

主な著書に『Ono no Komachi: Poems, Stories, No Plays』（1993年・共著）、『A Guide to Ezra Pound and Ernest Fenollosa's Classic Noh Theatre of Japan』（1994年・共著）などがある。

ティール リベラル・アーツ教育は「自由教育」と言い換えることができると思います。リベラル・アーツの本来の目的とは何でしょうか。辞書を調べると、ギリシャ・ローマ時代からルネサンスの頃まで「セブン・リベラル・アーツ」というものがありました。教養の根幹を成す「自由七科」ですね。LiberalはLibertyと語源は同じ。つまりリベラル・アーツとは、自由を得るための教育、自由を守るための教育でもあるのです。子どもが大人になるためには、社会に対する責任感を育てていく必要がありますね。

同志社の文献を見ると、例えば、「Board of the Pacific」の1898年9月号に掲載されていたデントン先生の手紙に「東京へ行くと、どこへ行っても同志社の卒業生が活躍している」とあります。男性だけではなく女性も活躍していると書いている。同志社の出発点には、このように「社会に対する責任感」がありました。日本の社会に役立つ教育をするという目標がありました。これがリベラル・アーツ教育の基本的な柱の一つです。

実際にはどんな方法で教育をするか。まず、セブン・リベラル・アーツにもあつたように、文法、修辭学、論理。これらを合わせるとコミュニケーションになりますね。つまり、リベラル・アーツはコミュニケーション能力を養う教育と言えるのです。まず自分の頭の中を整理し、物事を調べ、自分の考え方を持つ。次にそれを人に伝える。また、他の人の言うことを正しく理解する。こうしてコミュニケーションが成立する。これがプラトンやソクラテスが実践した、ギリシャ文明の時代からある方法です。では、このコミュニケーションを誰と行うのか。



## 松井圭伊子

【学歴】

2004年3月 同志社女子大学 学芸学部英語英文学科 卒業

2006年3月 同志社女子大学大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程(前期) 修了(文学修士)

2006年4月 同志社女子大学大学院文学研究科英語英文学専攻博士課程(後期) 入学 現在に至る

【研究分野】

イギリス人作家トマス・ハーディ(Thomas Hardy、1840-1928)の小説研究

ソクラテスは生徒たちと平等に話しました。そこでは知識だけではなく、知恵が育つ。知識を使って行動するところには知恵が必要です。この知恵を育むこともまた、リベラル・アーツの目的の一つです。また、学生同士だけでなく、地元とのコミュニケーションを取ることも大事です。リベラル・アーツを歴史的に見ると、オックスフォード、ハーバード、アーモストなどの欧米の主な大学では、教会中心ではありますが、必ず地元との関係を大切にしています。いま我々も近隣の高等学校や他の大学との連携づくりを行っているところです。

キリスト教主義は良心教育であり、男女の平等性を理解させることでもあります。国際主義とは、自分の国が特別であると思うのと同様に、他の国の立場からも物事を見る力を養うことです。いずれの理念も継承していきたいと考えています。

松井 今年4月には学芸学部国際教養学科が新設されました。学生、教員の方々の印象はいかがですか。

ティール 学生も教員も、素晴らしい人たちがそろいました。

ほとんどの学生は高校などで短期・長期の留学経験があり、海外でコミュニケーションできるんだという自信を持っていますから、その自信をベースにした高いモチベーションを持っていますね。それに、とてもフランクで明るい。自分の意見は率直に述べますし、教員の批判も率直にする(笑)。1期生なので先輩はいませんが、それだけに開拓者精神が感じられます。私は同志社女子大学に勤め始めたとき、日本語日本文学科の1期生を教えました。筑波大学でも開校2年目に1期生を教えました。1期生には共通するものがあります。冒険したいという勇氣と自信があり、夢と好奇心にあふれています。授業はとても楽しいですよ。

## 21世紀の女子教育と社会人教育

松井 学長は「いつの時代にも通用する専門性と技能を見つけた、品格のある女性を育成する」とおっしゃっています。同志社女子大学のめざす「品格」とは、どのようなものとお考えですか。

ティール 私が学長に就任してから、同窓会や地区別懇談会など、各地でいろんな素晴らしい卒業生と出会うチャンスがありました。そこで私がいつも感じるのは、皆さんが非常に落ち着いていること。同時に、教養がある。教育の基礎がしっかりしていて、優れた判断力を持つておられる。そして「社会はみんなのためのもの」という意識があります。心の在り方の問題ですね。それが同志社女子大学の品格だと思います。

松井 その品格とは、創立以来1世紀以上にわたり、この大学に継承されているものと考えてよろしいですか。

ティール そうですね。新島がアーモストで学んでいる時代、Mount Holyoke Female School<sup>1</sup>が、近くにあった女子校と既につながりました。このMount Holyokeの教育方針が、日本の女子教育が始まった当初から、宣教師によって日本に入ってきたのです。それが同志社女学校や神戸女学院、その他の女子校に導入された。その基本的なメソッドとは、女性には責任を持って生きる、男性と同じレベルの教育を受けると同時に家政学についても学ぶ。そして寮生活で先生と一緒に生活するなかで成長するというものです。このような教育方式と男女平等の考え方が、新島の望んでいたものでした。新制同志社女子大学の学長を務めたヒバード先生もMount Holyokeの卒業生ですから、こういう教育が同志社女子大学では伝統的に続いていたのです。

松井 男女平等の精神はとても重要だと思います。その上で女性の役割とは何であるとお考えですか。

ティール 同志社の良い点は、学生に多様な選択肢を与えていることです。同志社女子大学でも、必ずしも学生全員がキャリアウーマンにならないといけないわけではありません。それを望んでいない女性もいますし、専業主婦や母親という生き方でもとても大切です。その中から自分に合った生き方を選べばいいと思います。脚の長い鳥、短い鳥がいる。色も違う。いろんな鳥がいることを尊重することが大切。人間も同じです。

松井 数字の上では大学全入時代というなか、女子大離れが進んでいると言われます。大学としてどんな対策を講じていけますか。

ティール 一つは、現代のニーズに応える学部・学科を作るこ

とですね。もう一つは取得できる資格や資格講座の幅を広げていくこと。例えば今年4月から、博物館学芸員の資格が取れるようになりました。これらは学生が社会に出るための準備です。時代は常に変化していきますから、時代のニーズに合った受け皿を作ることは重要です。

我々は、できる範囲で、我々の教育理念に沿った改革をすることになります。私が今の日本社会を見ていて非常に必要性を感じるものの一つは、コミュニケーション能力です。私は昭和25年から日本に住んでいます。昔の日本人には「言わなくても分かる」という感覚がありました。言わなくてもコミュニケーションが成立している。しかしこの5、6年、それができなくなってきた。日本社会が変わってきました。ですから今は、コミュニケーションを丁寧に進めないとはいけません。しかも、自国語によるコミュニケーションを進める必要があります。もう一つ大切なのは、やはり良心教育です。何が正しくて、何が間違っているのか。自分の心の中を正しく見ることが大事です。それが我々の教育の目標にならなければいけないと考えています。

松井 「心を見る」というのは、難しいことですね。

ティール 難しいけれども、同志社女子大学で礼拝が毎日あることも、心を見るために必要なことではないでしょうか。それから我々は少人数教育を大事にしていますが、先生と学生、また学生同士の間やかなコミュニケーションによって、心が見えるようになればいいと思います。

松井 少子化の一方で、意欲をもって再び大学で学びたいという社会人や高齢者の方々がおられます。

ティール 同志社女子大学には、既に社会人入試システムがあります。経験豊かな学生や院生が増えるのは大学にとって非常にいいことです。これはアメリカなら普通なんですね。子育てを終えた女性が大学に行くケースも多い。それにアメリカでは高卒と大卒の給料が大きく違うため、学ぶモチベーションが違うのです。日本では給料格差がアメリカほどではないので、大学で学ぶモチベーションが不足していると思います。大人としての勉強ならカルチャーセンターへ行けばいいじゃないかという考えも、日本にはある。社会人が大学で学ぶことの、日本なりの魅力づくり、メリットの明確化、環境整備が必要です。アピールも、もつとしないといけないと思います。

### 真実を求める姿勢と“祈り”を大切に

松井 学長は、今まで数々の重要なお仕事をしてこられたと思います。困難に直面したときの乗り越え方を教えてください。ティール 私が国際交流センター所長になったとき、「ほう・れん・そう」という言葉を教えてもらいました。円滑に仕事をするためには「報告・連絡・相談」が不可欠ということです。絶えず「自分一人で行っているのではない」という意識を大切にしています。もう一つ、新島やデイヴィスの日記や伝記を読んで感じたことがあります。「祈り」が非常に大事だということです。私も悩んだときは、とにかく祈りました。キリスト教の祈りはイエス・キリストに祈ることですが、別の視点から見ると、祈りとは自分を離れ、自分の心を見ることでもあるのです。いつもと別の立場から知恵を要求する。キリスト教精神を持つ大学ですから、祈ることと聖書を読むことは大事だと思う

ています。

先日キリスト教学校教育同盟の集まりに出席して、非常に感動したことがあります。皆さんが強いキリスト教精神を持ち、こういう時代だからこそ今の日本には良心教育が必要なのだと考えておられることが分かったのです。表には出しませんが、行動で示している。私も自分でキリスト教を宣教するつもりはありませんが、自分がモデルとなつて行動で示さなければ思っています。教職員が学生のモデルにならないといけないし、その前に学長がモデルにならないといけない。総長と理事長を見ていて、非常に勉強になります。

松井 学長の立派なひげは今やトレードマークですが、何か理由があつて伸ばしておられるのですか。

ティール 伸ばし始めたのは21歳のときです。理由は三つ。まず、剃るのが面倒だから（笑）。二つめは、父がやはりひげを伸ばしていたので、子どもの頃からその姿に憧れていたから。三つめはこんな話です。1966年から4年間、私は空軍で情報分析の仕事に就いていました。そこで、政府が国民に対して嘘をついているのを知った。それからです、ひげを伸ばすようになったのは。そのときのことを忘れないという、自分へのメッセージですね。

クラーク博士は“Boys be ambitious!”と言いました。私は学生たちに“Girls be suspicious!”と言っています。何に対しても真実を求めて、好奇心を持つという意味です。そういう学生を育てたいと思っています。

（2007年7月13日 京田辺キャンパス学長室）